「現在」は「新しさ」の湧出点という特権的な意味をもたないようにも見えます。このように考えてみると、「まさにいま」が生み出す「新しさ」とはいったい何を意味するのでしょうか。古川先生もまた論文や著書でこの論点に着目しておられます。先生は「円環的回帰的時間においては、すべての瞬間に「死と再生」が、時間の「絶対的更新」がある」（『偶然と運命　九鬼周造の倫理学』、ナカニシヤ出版、二〇一五年、五九頁）と書かれています。

しかしながら、私はいまだ時間のこうした二重のあり方を十分に理解できていません。なぜこのようなことが可能であると九鬼は考えたのでしょうか。もちろん私は、このような九鬼の議論が矛盾しているものであると言いたいわけではありません。九鬼のような優れた哲学者がこの問題に気づいていなかったなどということはありえない。彼は自覚的にこうした二重性を提示したに違いないのです。したがって私は、私たち人間はどのようにしてその二重構造を生きることができるのか、それがたとえば先生がご講演で挙げられたような悲劇（この表現は非常に示唆的です。大仰に言えば、「劇」とはその時その場でのみ生じる「示現」であると同時に、繰り返し演じられることを前提とする「再現」であるとも言えるでしょう）において、また人間が生きていく上で、いかなる意味をもちうるのかという問いをここで提示します。思わず目をそむけたくなるような、二度と繰り返してほしくないような出来事、そしてその悲惨を「運命」として受け入れることを選んだ人々。九鬼のテキストを読むことによって、こうした場面において何を言い、何をもたらすことができるのでしょうか。「新しさ」と「反復」、「創造」と「回帰」が奇妙に溶け合い混じり合うまさにこの点に、九鬼の時間論の実存的な核心が存しているように思われます。

記念講演会
「第一回九鬼周造記念講演会」
二〇一九年七月一三日
於・甲南大学

○司会　少し雨の降るなか、多数の皆様にお越しいただきまして、ありがとうございます。

本日のプログラムは配付しておりますそちらのスケジュール表どおりで進めてまいります。

まず最初に、今回主催であります人間科学研究所の所長の森先生から、九鬼周造と甲南大学はどういうかかわりがあることなどをご紹介いただき、そのあと、古川先生にご講演を

いただきます。それから、このご講演へのコメントをお二人のコメンテーターの先生方からいただき、そして、そのコメントにたいして古川先生からなんらかリプライをいただいて、その後、お越しの皆様も交えて古川先生のご講演をめぐって、質疑応答、語り合う時間にいたしたいと思っております。

今回、この九鬼周造記念講演会というものを新たに創設しまして、第一回ということで開催させていただくことになりました。ことしは甲南学園の一〇〇周年という年にあたります。次の一〇〇年に向けて、こうした講演会は、二〇年、五〇年、一〇〇年と続いていくことに意義がある種類のものであろうと思いますので、ちょうど節目にふさわしいということで、ことし開催させていただくかたちになりました。

過去の偉大な哲学者の名前を冠した講演会は、幾つかの大学さんでされておられます。甲南大学と同じように旧制七年制高等学校の一つであった、学習院大学さんでは、三宅剛一という哲学者の名前を冠して「三宅アーベント」を開催されていますし、また、いわゆる日本哲学の代表的な人物の西田幾太郎などについては、京都大学で西田・田辺記念講演会というのを毎年実施されています。

そうした《伝統》の面がある一方で、近年、フランスとか、ドイツとか、アメリカで《日本哲学》の研究が盛んになってきています。興味を持つ人がふえている。それがなぜかということは、いろいろ多角的に検討する必要がありますけれども、とにかく現象としては流行を見せております。そのなかでも、もちろん西田もそうですが、くわえて、九鬼周造が特に人気があるようです。読みたい、それについて考えたい、語りたいという方が多い存在になっています。

伝統というような面と同時に、今、世界で新たな動きとして《日本哲学》や九鬼周造について注目する、研究する、語るということが動きつつある。そのなかで、九鬼周造文庫を備えているこの甲南大学で九鬼周造についてのイベントを開催するというのは、これは甲南大学が当然担うべきことであるし、そして、世界のなかで甲南大学でしかできないことでありますので、それをこうして開催できる運びになったことを、喜ばしく思っております。

それでは、さっそく内容に移りたいと思います。

まずは、所長の森先生からご挨拶を、よろしくお願いいたします。

○森　甲南大学人間科学研究所の所長を務めております森と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今、川口先生からお話がありましたように、本日は人間科学研究所にとって記念すべき講演会であると受けとめております。

甲南大学と九鬼周造の縁が生まれましたのは、京都大学時

代の九鬼の同僚であり友人の哲学者、天野貞祐が、甲南大学の前身であります七年制甲南高校の校長として赴任したことによります。天野貞祐が校長在任中に、九鬼周造の蔵書、原稿、日記その他の資料が甲南高校に寄贈されたことで、現在甲南大学が所蔵する九鬼周造文庫が生まれました。

川口先生は、その細かないきさつや、現在までの過程を話すことを私に期待されているかもしれませんが、その過程を述べるには細かな歴史的検証を必要とします。また、過去に九鬼文庫の整理に関わってこられた先生方がすでに文章を残しておられます。ここではごく大まかなお話でご勘弁いただきたく思います。

そもそも、天野貞祐が甲南高校に赴任されたことからわかりますように、京都大学の哲学教室と甲南大学の間には深い結びつきがあります。戦後の歴史の中で甲南大学は実業家養成大学という性格付けが一般的になったと思われますが、他方で、七年制高等学校の一部を教養部に受け継いだ文理学部によってまず創立されたことにもあらわれていますように、アカデミックな志向も兼ね備えています。そしてその伝統に哲学が重要な役割を果たしてきたと思われます。私が甲南大学に着任した三五年前には、佐藤明雄、深谷昭三、谷口文章の各先生が哲学教室におられ、うちお二人は京都大学出身でした。

しかし、皆様御存じのように、その後、大学の機能別分化を進める文部科学省の方針の下で、多くの大学において哲学が厳しい立場に置かれてきた歴史があります。哲学教室を維持することが難しくなった大学も少なくないと思います。そのなかで哲学の火を絶やさず現在も人間科学科に当時と同じ三名の哲学を専門とする教員がおられることは、私たちの誇りとするところです。川口先生が赴任されここに九鬼周造記念講演会を立ち上げられるに至ったのは、甲南大学の歴史を踏まえつつ、現在の世界の研究事情を見渡した上での決断だと理解しております。人間科学研究所という組織がその実現にわずかでも貢献できたとすれば私たちの喜びでなければなりません。

もうひとつの縁についても述べておきたいと思います。九鬼周造本人と甲南学園は直接のかかわりがないわけですが、九鬼家の源は兵庫県三田市にありまして、三田市には九鬼家住宅を保存した「旧九鬼家住宅資料館」があり、観光資源ともなっています。今日の話題にも登場します九鬼周三の父親、九鬼隆一は、その家で生まれ育ったわけではありませんが、三田で生まれ、九鬼家を継いで東京に出て活躍した政治家です。関心がおありの方はぜひ三田市を訪れていただけるとありがたく思います。人間科学研究所のものとしてというより兵庫県の地域創生戦略にもいささか関わっているひとりとし

てのお誘いです。

甲南大学と兵庫県の二つの意味で、九鬼文庫がここにあり記念講演会が開催されることは、九鬼の哲学が扱っているとおり、偶然と自然の織りなすなかでの運命的な出来事と言いましても大げさではないでしょう。

本日、記念すべきその第一回講演会をしていただく古川雄嗣先生にあらためて感謝したいと思います。前もって原稿を送ってくださいましたので、私も読ませていただきました。「思っていた以上に」という表現は誤解を招く表現ですが、実際、個人的期待を超えた内容に感銘を受けました。決して議論の水準に関する感想ではありません。心理療法という私の専門領域に大いに関わる内容を含んでいるという意味で、正直驚いてしまったわけです。

本当はのちの討論のなかでさせていただいたほうがいいのかもしれませんが、少し内容のほうにも触れますと、九鬼周造の出生や幼少期の体験がいかに彼の哲学と絡み合ってるかという話題が登場します。今私は、人生史をたどる心理療法を専門の中核に置いてるものですから、私たちが出生に関わる事情や幼少期の体験を自身の人生の運命としていかに受け止めるかという課題に深い関心を持っております。

九鬼隆一とともにアメリカに滞在していた九鬼の母親は、周三の出産のために日本に戻りますが、そのことが周三にとって、そして母親にとって、その後の人生に決定的な役割を演じる事態を招きます。人生を振り返り、また自身の哲学を構築する過程で、自分が生まれなかったら母親の人生はまったく異なったものになったであろうと九鬼は考えたに違いありません。

ウェブ上での公開が進んでいる九鬼文庫を見ますと、父親の隆一が日本領事として夫人と共にアメリカに滞在した頃の華やかな様子を示すアメリカの新聞記事があります。周造はスクラップ帳に保存されていたその記事を読み、自分が生まれる前の母親の生活に思いを巡らせたことがあるのではないか。そして、自分が生まれないほうが母親はもしかして幸せだったかもしれないというようなことを考えたかもしれないと、これは私の空想です。

こうした主題は九鬼だけの問題ではなく、出生後の体験の整理を超えて遡り、出世以前の事情を人生史とどう繋いでいくかも、先ほど申しましたように、心理療法の重要な主題です。私たち心理療法家は、その課題を個人個人の営みとして臨床実践で扱っているわけですが、九鬼は、哲学者として、普遍的主題として追究し続けたのだろうと思い、きょうのお話を楽しみにしてまいった次第です。

ご挨拶という役割を超えて、私の思いまで先走って申し上げてしまいましたが、古川先生の議論に触発されたためと理

解いただきお許しください。本日の会が豊かな成果を生み出すことを願いながら、御挨拶にかえさせていただきます。

○司会　研究所長の森先生よりご挨拶をいただきました。

続いて、本日登壇の三人の先生方のご紹介をさせていただきます。本日は来聴自由ということで広く一般の皆様にお越しいただいております会ですので、あまりかた苦しいご紹介などは私からは申し上げずに、むしろ、この後三人の先生方のお話から先生方の思想と同時にお人柄もおのずと伝わるものと思いますので、簡単なご紹介にとどめます次第です。ご講演いただきますのは、北海道教育大学旭川校准教授でいらっしゃいます、古川雄嗣先生です。

古川先生は、皆様のなかにもすでにお読みになった方も多いと思いますけれども、二〇一五年に『偶然と運命』という、九鬼周造についてのご著書を出版されています。今、われわれ研究者の業界でいう中堅世代のなかで、九鬼周造研究における代表的な存在でいらっしゃいます。

また、そのほかにも、「看護」についてのご著書ですとか、また、先ほどの森先生のお話にも少しありましたが、文部科学省の政策による大学改革というものを、批判的に検討し直そうとする貴重な仕事の編著者をなさっておられますし、また最近では、『大人の道徳』という大変面白い本を出されました。大変評判の高いご本でございまして、実は先生の文章は、本当に、書かれたものでも直接語りかけられるような大変読みやすい文章を書かれるのです。私などはそこからもっと見習わなければならないといつも思うもので、見事な文章の書き手でいらっしゃいます。

それから、コメンテーターの先生のご紹介をいたします。

まずは、京都大学非常勤講師の長岡先生です。長岡先生は、西谷啓治などの京都学派の宗教哲学を研究しておられます。九鬼も京都学派というグループに含まれている思想家ですので、本日のテーマにふさわしいコメンテーターでいらっしゃいます。甲南大学の文学部でも授業をお願いしてご担当いただいております。

それからもう一人、舞鶴工業高等専門学校の講師をしておられる山根秀介先生です。山根先生は、ウイリアム・ジェイムズをご専門にしておられます。ジェイムズは西田幾太郎を始めとして京都学派の人たちには大変よく読まれた哲学者・心理学者です。そういう意味でも、きょう山根先生の御専門と、また古川先生のご講演内容を絡めて、しっかりお話が伺えるのではないかと思っております。

それでは、古川先生のご講演に移らせていただきます。古川先生、よろしくお願いいたします。

【古川先生の講義内容は九七ページに掲載】

【長岡先生のコメントは一一四ページに掲載】

長岡先生のコメントにたいする古川先生からの応答

○司会　長岡先生、ありがとうございました。

ニヒリズムの問題や、仏教的なものについて、「自覚」や「悟り」という事柄を問うていただけたのと同時に、九鬼の『いきの構造』などで言われていたこと、あるいは、それについて、古川先生がほかの文章などで言われてることについても含めて、有意義なコメントを頂戴したかと存じます。

では、古川先生、いったん何らかのリプライのほうを、よろしくお願いいたします。

○古川　どうもありがとうございます。きょうの講演は学会発表のような学術的なものというよりは、一般向けのわかりやすいものにというふうに伺っておりましたので、なかなかこういういわゆる「ガチ」なコメントをいただくとは思っておらず、ちょっと油断をしておりましたけれども（笑）、やはり自分が気になっているところは指摘されるものだなと、改めて思いました。

前半でご指摘いただいた二つの方向は、九鬼自身が言っていることでもあって、彼は「意志の肯定」と「意志の否定」という言い方をします。私なりの言い方で言う「生きる意味」というものへの問いは、確かに、ある意味では、その問い自体がまさに我執であって、私が生きる意味を問うということは、そのこと自体が、まさに私が「私」というものに囚われている状態であるとも言えるわけですね。それをむしろ肯定して、積極的に「生きる意味」を建設していく方向に向かうのか。それとも、それを否定して、その囚われそのものから脱却する方向に向かうのか。その二つの生き方であると私は理解しています。

ご指摘のように、九鬼はおそらく、その二つをまったく別々のものと考えていたわけではなく、何らかの仕方でその両者を総合するような生き方を考えていたのだと思います。

それは、私なりの解釈で言うと、これも概ねご指摘のとおりと思いますけれども、未来に向けての必然性と過去に向けての必然性との両方の側面を考えていた、ということになります。きょうは単に「偶然の必然化」とだけ言いましたけれども、正確には、必然性には因果的必然性と目的的必然性との二つの種類があります。因果的必然性は原因と結果との関係、目的的必然性は目的と手段の関係における必然性です。そしてそれは、時間性格としては、因果的必然性が過去的のもの、目的的必然性が未来的のものとして現象します。過去の原因から現在の結果が必然的に導かれるのが因果的必然性、未来の目的から現在の手段が必然的に導かれるのが目的的必然性、ということです。

そうすると「偶然の必然化」というのはどういう論理になるかというと、まず、一次的には、現在の偶然性がある。そして、二次的に、その現在の偶然を、過去の原因によって与えられた結果として考えるときに、その偶然が因果的に必然化される。他方、それを何らか未来の目的のための手段として考えるときに、その偶然が目的的に必然化される。こういうことになります。過去を回顧することによる因果的な必然化と、未来を先取することによる目的的な必然化です。

偶然の必然化には、本来その両面があって、しかも、その両面は切り離すことができないわけです。なぜ切り離すことができないかというと、目的―手段関係は、九鬼の言い方では「倒逆的の因果関係」、つまり原因―結果の関係をひっくり返したものであるからです。この点は、時間は直線的ではなく円環的だと考える九鬼の時間論とも関係するところですけれども、要するに、現在の偶然が過去の原因によって与えられた必然的な結果であると考えることができるということが、すなわち、それを未来の目的のための手段として考えることができるということでもある。両者は同時に成り立つし、同時にしか成り立たないわけです。

したがって、きょうは偶然の必然化という問題について、単に未来に向けての目的的な必然化の側面だけをお話ししましたけれども、本当はそれは、同時に過去に向けての因果的な必然化をも含むわけです。因果的に必然的な結果として、現在の現実が与えられたのだという自覚ですね。それは、ある種の決定論的な見方でもあって、いわば、どれほど悲惨な現実であったとしても、それは必然として与えられたものである。そうならざるを得なかった、それ以外ではあり得なかったという、深い必然性の自覚です。九鬼はそれを「諦め」と言います。

そういう意味での「諦め」に基づいて、現在を受け容れるということと、その現在を、何らか未来の目的のための手段として生かすということとは、いわばコインの表裏のように、同時に実現する。先ほど言った「意志の否定」と「意志の肯定」との総合というのはこういうことであって、九鬼は前者を「諦め」や「諦念」、後者を「意気（いき）」や「気概」と表現して、その両者のいわば弁証法的な総合こそが本当の道徳だということを言っているわけです。

もう少し、それに関わって申しますと、したがって、そこで実現される必然性とか「生きる意味」とかというのは、ちょっときょうの私の話し方だと、まさに主観性というご指摘をいただきましたように、人間がまったく自由に創造できるものというような、ある種サルトル的な実存主義のように受け取られかねないと思うのですが、やはりそうではないわけです。九鬼は、「あきらめ」とは「あからめ」、つまり何かを明らか

にするという意味であって、では何を明らめるのかというと、それは必然性を明らめるということだと言います。

ですから、ここで言う必然性とか「生きる意味」とかというものは、人間がまったく自由に恣意的に創り出すものではなくて、むしろ受け取るとか、受け容れるとかという、受動的な側面を含んでいます。つまり、ある意味では我執を絶って、与えられた現実を、いわばありのままに受け容れるという、受動的な態度によってこそ、必然性が自覚される。そういう側面を、同時に含んでいると考えることができると思います。

○司会　ありがとうございました。

偶然ということが、それ自体が立ち上がって、必然性に出くわせをするか、必然性を与えられる、それはどういうことか。あるいは、一方的に与えられてしまう自分、自己、主観性、それはどういうものなのか。こうしたところまでお話が深まっていくと同時に、現在、将来、過去というような時間の問題、九鬼哲学はひとつの時間論であるというようなお話にも進んできました。そのお話になってきたところで、時間論についての他の思想家との比較などに関連したコメントを、山根先生から今度はいただけるものかと思います。

それでは、山根先生、コメントのほう、よろしくお願いいたします。

【山根先生のコメントは一一八ページに掲載】

山根先生のコメントにたいする古川先生からの応答

○司会　山根先生、大変ありがとうございます。

九鬼の、一九二八年にフランスのポンティニで行った「時間の観念と東洋における時間の反復」という論考、および、それについて古川先生がご著書のなかで言われていることを踏まえつつ、《直線的時間　対　円環的回帰的時間》という時間の二重性を踏まえたうえで、今とか、新しさということがあるとすれば、それは何であるのかというようなことを興味深い仕方でコメントくださったかと思います。

そしたら、古川先生、どうぞよろしくお願いいたします。

○古川　ありがとうございます。『偶然と運命』という本でも書いたことなのですが、九鬼の偶然論は、本来、時間論を背景にして読まないと、正しく理解できません。にもかかわらず、きょうの講演では時間論はまったく扱いませんでしたので、ちょうど補足をしていただいた形になり、ありがたく思います。

九鬼の回帰的時間論においては、「新しさ」というものがないのではないかというご指摘でした。しかし、九鬼の論理に即せば、それぞれの瞬間は絶対的に新しいです。というのは、回帰的時間というのは、時間が円を描いて無限に回帰す

るということですけれども、実はそういう言い方をする時点で、これは矛盾なんですね。なぜなら、同じものが繰り返すということは、通常の論理で言えば、あり得ないわけです。「同じ」と言ったら一つですし、「繰り返す」と言ったら複数です。だから、同じ時間が何度も繰り返すというのは、矛盾以外の何ものでもない。

ですから、実はそういう言い方も、九鬼の回帰的時間を厳密に正確に表現したものではないと思います。完全に円であるということは、繰り返さない。繰り返すのであれば、それは円ではなくて螺旋です。見分けがつかないほど類似した複数の円が重なり合うということです。けれども、九鬼が言っているのはそういうことではない。厳密に一つの円なんです。だからそれは一つしかない。円周上の各点、つまり時間上の各瞬間は、厳密に一回限りのものです。

したがいまして、先ほど二重構造というふうにおっしゃいましたけれども、まさにそうで、一回性と複数性とが矛盾的に貼り合わされているというところに、九鬼の時間論の非常に大きな特徴があります。

そうすると、これはかなり思弁的な話になってしまうのですが、同じ円が繰り返すという矛盾的なことが成り立つためには、それぞれの瞬間は、生まれると同時に絶対的に消滅しなければならない。九鬼はそれを「絶対的更新」と言います。時間は瞬間ごとに絶対的に更新される。だからそれは絶対的に新しいわけです。

別の言い方をすれば、それぞれの瞬間は、無限の過去と無限の未来、いわば形而上的な過去と形而上的な未来とに、厳密に同一の瞬間を無数にもっている。それでいて、それぞれの瞬間は厳密に一回限りのものである。ちょっと何を言っているのかよくわからないかもしれませんが、ともかくもそうとしか言いようがないような構造なんです、九鬼の言っている時間というのは。

では、九鬼はいったい何のためにそんな思弁的な話をしているかと言うと、要するに彼が言いたいのは、だからそれぞれの瞬間は絶対的に偶然なのだということなんです。絶対的に新しいということは、絶対的に偶然であるということです。

そもそも、「偶然性」と「新しさ」というのは、ほとんど同義であると言ってもいい。というのは、必然性というのは、既にあったものです。結果が原因の中に予め含まれていたわけですから、それは何も新しくない。偶然なものだけが新しいわけです。

きょうは九鬼の偶然性と必然性の構造をイメージで説明しましたけれども、もう一度言いますと、その都度の瞬間が、いわば底から沸き上がってくるようなイメージです。我々は通常、現在の瞬間というのは過去から水平的にもたらされる

ものであるようにイメージしますけれども、実はそうではなくて、それぞれの瞬間が、その都度、底から、垂直的に、噴出してくる。そして、それを二次的に結合したところに、必然性というものが見いだされる、ということです。第一次的には、あくまでも、瞬間という偶然性がある。

このことを経験的な次元で言うと、結局、未来は根本的に予測不可能であるということにもなるかと思います。我々は必然性の原理に基づいて、未来はこうだろうという予測を立てるわけですけれども、そこには必ず不測の要素が介入してくる。未来には必ず何らか新しさの要素が含まれてくるわけです。

ちょっと論点がずれてしまうかもしれませんが、では、このことが我々の生にとって、具体的にどのような意味をもつのか。私の考えでは、それぞれの瞬間は絶対的に新しいという九鬼の時間論は、いわば、あらゆる瞬間が、私たちの生にとって新しい始まりになり得る、ということを指し示しているように思います。未来は過去によって必然的に決定されるのではなくて、根本的に新しい。

ちょっと俗っぽい言い方になることを承知のうえで、このことをもっと日常的な言い方に落とし込むとすれば、我々は何度でも人生をやり直せるということでもある。今までどんな悪人だった人間も、今この瞬間から生まれ変わることができる。今までがどれほど不幸な人生であっても、明日には何かが変わるかもしれない。そういう希望をもって生きることができる。それぞれの瞬間が絶対的に新しいという時間論は、ちょっと安易な言い方かもしれないことを承知のうえで言うんですが、基本的には、こういう「希望」というものを原理的に保証するような時間論であると言えるのではないかと考えています。必然性しかないのであれば、今悪人である人間は、明日も悪人でしかあり得ません。今不幸な人間は、明日も明後日も永久に不幸です。何も変わらないのですから。

だいぶ話が逸れてしまったかもしれませんが、「新しさ」という点について、私はそういうふうなことを考えています。

○司会　ありがとうございました。

たぶん山根先生のほうから、再質問と申しますか、おっしゃりたいところがあると思いますけれども、ひとまず、フロアの皆様に議論を開きまして、質疑応答を展開していこうと思います。

フロアを交えての質疑応答

では、いかがでしょうか。

○質問者　きょうはご講演お疲れさまでございます。……大学の大学院生です。

私がうかがいたいのは、「運命」という言葉についてです

けれども、その運命に向かって自分の偶然を運命として必然としてとらえていくというふうに、その言葉を聞いたときに、すごくキリスト教的なものを感じました。たとえば、「最後の審判」に向けて、自分の一つ一つの行動を自分のなかに意味づけていくようなイメージを感じたのですけれども。でもその一方で、たとえば、最後に挙げられたJR脱線事件とかの例ですと、一つ一つの偶然を自分で運命づけていくという、運命は自分が決めるものだと。神から与えられたものではなくて、自分で運命をつくるんだというイメージもそこからは受けました。

運命が、九鬼にとって、神様から与えられるような変えられないものか、それとも自分でつくれるような、自分に即したものかということをおうかがいできれば。

○古川　ありがとうございます。結論から言うと、九鬼の言う「運命」という概念は、キリスト教のいわゆる「摂理」の概念とは、明らかに一線を画するものです。論理的に言うと、キリスト教の「摂理」は、一切を目的的必然性によって説明する考え方です。神の立場から見て、一切は必然である。目的的に必然である。目的的に必然であるというのは、あらゆる出来事は、神の最終的な目的、要するに神の国の完成ですけれども、その目的が実現するための手段としての意味をもつ、ということです。こういう考え方の典型として九鬼が挙げているのは、「人間にとっての偶然は、神にとって意図である」というボシュエの言葉です。

そうするとこの場合、結局偶然というものは存在しないということになる。我々人間が偶然だと思っているものは、単に神の意図が見えないだけであって、本当は必然だ、ということになる。そして、あらゆる出来事の意味ないし目的は、予め神によって定められている。それは人間がみずからの意志で創り出すものではなくて、神がはじめから決めているものであるわけです。

それに対して、九鬼の運命論は、いわばより人間的であって、人間を超えたところに何か神の意志のような目的的必然性があるというような考え方は認めない。その都度の偶然性を出発点にして、必然性を創造していくのは、人間自身なんです。

このことを九鬼はおもしろい言い方で説明しています。「通常の運命概念にあっては、目的的必然が目的的偶然を制約すると考えられるのであるが、勝義の運命概念にあっては、目的的偶然が目的的必然を制約する。または、交互的に制約するのである」と。ここで言う「通常の運命概念」というのが、キリスト教の言う摂理だと考えればいいと思います。そこでは、まず必然性があって、偶然性がそこにいわば組み込まれるわけですね。しかし、勝義の運命、つまり九鬼の言う

運命というのは、逆に、まず偶然性があって、その都度の偶然性が、いわば必然性を構成する。

そういうふうに、必然性そのものが偶然性を契機として更新されていくというのが、九鬼の運命論の一つの大きなポイントで、非常におもしろいところだと思います。

○司会　九鬼とキリスト教というのは、大変大きなテーマで、やりとりをうかがっているうちに、私のなかではいろいろお聞きしたいことが山ほど出てきましたけども、そこは自粛しておきましょう。そのほかの方でご質問がありますか。

それでは、西先生お願いします。

○質問者　甲南大学の西と申します。

甲南大学のスタッフとして、きょう、第一回の講演会で、本当に充実したお話をしていただいて、感謝しております。

私の専門は美学・芸術学ですので、本当に浅い一般的なことしか聞けないんですけれども、きょうのご発表では、九鬼自身の体験と言いますか、伝記的な事実の部分と、九鬼の理論の部分、ここのつながりの部分を、余りおっしゃらなかったですね。

うかがっていて、ここがどういうふうな形で結びついてくるのかなというのをずっと期待していたんですけども、最終的にはっきりとおっしゃらなかったので、おたずねします。

最初に研究所長が申しましたように、自分史的な九鬼の人生の捉え方と理論とのつながりのところを深く考えていくときに、哲学のテキストというのは自分史ではありませんから、ある種昇華されていないといけないわけですね。きょうの母親の例で言えば、似たような例として『暗夜行路』の場合であれば、文学的な消化の仕方があると思うのですけれども、やはり理論の場合は、もっと切れているというか、純粋な理論として読める部分があるはずだと考えます。

場合によっては、人生における苦悩であるとか暗黒の部分が、偶然性ではなくてむしろ、必然性とか様相に関する理論を全般に深めることもあり得ると思うんです。そこの部分で、きょう、おっしゃらなかったことがいろいろあるんじゃないかなと考えまして、もう少しうかがってみたいと思った次第です。

よろしくお願いします。

○古川　大変厳しいご批評をいただきまして、ありがとうございます。おっしゃるとおりと思います。

実はその問題に踏み込むと、またちょっと難しい問題が出てくるので、きょうは話をわかりやすくするために、あえて意図的に避けたところがありました。というのは、ちょうど先ほど長岡先生からご指摘いただいた、美の問題を視野に入れて考える必要があります。

そして、これも正直に申し上げますと、これは私自身の九

鬼解釈としても、まだちょっときちんと理解できていない問題として残されているところでもあります。というのは、きょうお話ししたのは、一言で言えば、倫理的な生の肯定の論理です。悲惨な出来事であっても、目的的に必然化して、何らか、せめてもの意味を見いだして肯定する。これは別の言い方をすれば、時間の水平面における瞬間の必然化と、それによる肯定ですけれども、九鬼にはそれと同時に、瞬間を瞬間として、いわば垂直的に肯定する、という論理があります。そこに現れるのが、美という概念なんです。

きょうは私はその側面についてはまったくお話ししませんでしたけれども、実は、九鬼自身が、みずからの生、あるいは父や母や岡倉の生を、どのように肯定していたかという点について言えば、明らかに後者です。

というのは、きょうも「岡倉覚三氏の思出」というエッセイを紹介しましたけれども、このエッセイの最後に、九鬼はこんなふうに書いています。「私は今では岡倉氏に対して交じり気のない尊敬の念だけを抱いている。思い出のすべてが美しい。明かりも美しい。陰も美しい。誰も悪いのではない。すべてが詩のように美しい」。

特にこの最後の「すべてが詩のように美しい」という一文が決定的で、これがまさに九鬼自身の人生観なんですね。というのは、彼は文芸論も書いていて、とりわけ詩、短歌や俳句も含めた広い意味での詩の哲学的な意味を詳細に論じているんですが、そこでも、詩というのは、簡単に言えば瞬間の美を表現するものだと捉えているんです。例えば小説は、水平的な時間の流れにおいて成り立つものですが、それに対して詩は、その都度の瞬間の中に、いわば奥深い美を見て、それを表現するものである。そういうふうな見方をしています。

そしてこれは、まさに人生観や世界観でもあって、あらゆる瞬間を美しいものと見る。人生や世界を、善いか悪いかとか、意味があるかないかとかでなくて、美しいがゆえに生きるに値するものとして肯定する。そういうふうな見方です。

こういう美的な人生観・世界観と、私がきょうお話しした、いわば倫理的な人生観・世界観とが、九鬼の中でどういうふうに総合されていたのかというのは、ちょっとまだ私にははっきりとはわかりません。不十分な回答ですみませんが、単に私がわからないだけではなくて、九鬼研究に残されている課題でもあると思っています。

○質問者　ありがとうございました。

○司会　古川先生の九鬼理解の大きい輪郭が、かなりよりわかってくるような質疑のやり取りでした。いまの西先生とのやりとりでは、美的なものということが出てきました。くわえてそれが、ひとつ九鬼の独自な境地というようなものであると。しかもそれは、なにか英雄的な肯定というものとも違う。か

といって、その美的なものを、また仏教的なものへの方向でとらえうるかといえば、またなにか少し違う。リプライとして古川先生がお話しされたなかでは、詩のようにということがありましたが、さらにそこをどう踏み込んでとらえるか。

では、ほかの方からのご質問に移ろうと思いますけれども。もう時間が押しておりますのではありますが、コメンテーターの先生から何か追加といいますか、これは聞いておきたいということはなにかありますか。

○山根　瞬間、瞬間の偶然、新しさと瞬間性はすごくよくわかるのです。ただ、九鬼研究者に怒られそうな言い方ですけども、それだけだったら、ベルクソン、ジェイムズがすでに言ってることで。じゃあ、繰り返しだけであれば、ニーチェでいいと思うんです。

九鬼は、その二つ、どっちも言っているというところが、僕はすごくおもしろいなと思っているんです。新しさ、予見不可能性、それが基本になると九鬼は言っているんですが、しかも、それが無限回繰り返されるということが、苦境のなかで行為する人間にとって、どういう意味があるんだろうかというところが、さらにお尋ねしたいところです。

○古川　ありがとうございます。まさにおっしゃるとおりで、瞬間性という面で言えばベルグソン、繰り返しという面で言えばニーチェで、その両方の契機が含まれているという点が、九鬼の時間論の独特でおもしろいところですよね。ついでに言うと、時間は未来からやって来るというハイデッガー的な見方をする面もあります。きょうの私の話は、実はその側面を強調したものでもあるわけですけれども、いずれにせよ彼の時間論は、ベルグソン、ニーチェ、ハイデッガーが全部含まれている。

おそらく九鬼自身も、自分はそういう様々な時間論を総合しているんだという自負をもっていたと思います。ついでに言うと、だから先ほど申し上げたように、美的な側面と倫理的な側面という両面も、彼の哲学には含まれてくるのだと思います。

そのうえで、同じ時間の無限の繰り返しという矛盾的な彼の時間論がどういうふうな意味をもつのかという点について申しますと、これがまさに、先ほど言った美的な世界観の基盤になるんです。

先ほど、最初の山根先生からのご質問に対する回答の中で、九鬼の時間論というのは、いわば無限の過去と無限の未来に、同一の瞬間が無数にあると考えるものだと言いました。このことを九鬼は、一回限りのその都度の瞬間が、「無限に深い厚みをもつ」という言い方をします。単なる瞬間であれば、それはまさに一点において過ぎ去る無に等しいものであるわけですけれども、それが同時に、無限に深い厚みをもつ。何

か形而上的な厚みというか、深さをもった瞬間として受け取られる。

そして九鬼は、そこに美を見るんです。その無限に深い厚みというのが、まさに彼の言う美しさなんですね。

先ほど、詩は瞬間の美を表現するものだということを言いましたけれども、まさにそういう意味での美しさを表現した詩の典型として、彼が非常に好んだのが、芭蕉の「橘や　いつの野中の　ほととぎす」という俳句です。野原で橘の花が香っていて、ほととぎすの声が聞こえる。あれ、なんか、同じ瞬間がずっと遠い過去にあったような気がする。あれはいつのことだったかな、と。九鬼によれば、この「ずっと遠い過去」というのは、形而上的な過去なんです。つまり、このとき、人間は時間の秩序から解放されている、とも九鬼は言うんですけれども。

先ほど言った「思い出のすべてが美しい」「すべてが詩のように美しい」というのも、結局はこういうことなんです。すべての瞬間が、単に過ぎ去ったものではなくて、なにか無限の深い厚みをもった美しい瞬間として立ち現れる。九鬼にとって回帰的時間というのは、世界をそういうふうに見ることを可能にするものだったのだと思います。

○山根　ありがとうございます。

○司会　関連して、ご質問がありますでしょうか。

それではここでちょっと私からも、一つだけおうかがいさせていただきます。

古川先生にも、ほかの先生にも手短にお答えいただければうれしく存じます。

どのご質問のなかにも込められていたし、どのご発言のなかにもあったかと思いますけれども、「運命」というこの日本語の単語ですが、これがなかなか人によって、あるいは文脈によって、理解、印象が違うと言いますか、厳しい宿命というようにとらえられることもあれば、何か自分が積極的な意味づけを持って喜ぶべきものというようなニュアンスのときもあり、大分幅があるかと思われるのです。

それが、きょうは色々なほかの言葉とのかかわりで色々な文脈で言われたと思うのですけれども、その幅とか、あるいは、「運命」にはこういう面があるんだとか、ないしは、もっとほかの言葉のほうがよかったかなと思うとか、そうした事柄が何かありました、おうかがいできればと思います。

たとえば英語では、どの語に当たることになりそうでしょうか。いま「fate」と言うと若い人の耳にはまた違うニュアンスで聞こえるでしょうけれども、でも、それもまた日本語の文化として存在しているのではありますので、いま二〇一〇年代で「運命」という語はどういう感じに聞こえるのか。もちろん、九鬼の、今からすると七、八十年前と今とだった

ら、また違うかもしれないわけですが。

○古川　まさに九鬼自身が、ちょうど「いき」という概念を極めて精緻に分析したのと同じように、「運命」という概念の分析を非常に丁寧にやっているところがあります。まさにおっしゃったように、一口に運命と言っても、場合によっては全然正反対の事柄を指し示していたりする場合もありますので、そこをきちんと論理的に整理している点も、彼の偶然論・運命論の大きな功績であると思います。

それを踏まえて、ちょうど先ほどもフロアの方からの質問でキリスト教の摂理と九鬼の言う運命との違いという話が出ましたけれども、それをもう少し敷衍して申しますと、九鬼の言う運命という概念は、キリスト教の言う摂理と、通常、一般的に言われる運命という概念との、いわば間にあって、その両者を総合するような、動的なものだと言うことができます。

というのは、先ほども言いましたように、摂理というのは、目的的必然によって一切を説明する概念です。他方、一般的な意味での運命というのは、これは反対に、因果的必然によって一切を説明する概念です。いわゆる決定論ですね。もちろんこれは古代からあるものですが、いわゆる古典力学をベースにした近代科学もまさにこれです。

九鬼がおもしろいのは、キリスト教も近代科学も、いわば同じ穴の狢だと言うんです。なぜなら、どちらも独断的に偶然性を認めない。キリスト教は、先ほど言ったように、すべては神の意志によって未来から必然的にもたらされた結果であって、偶然など存在しないと言う。近代科学もまた、すべては原因によって過去から必然的にもたらされた結果であって、偶然など存在しないと言う。これらはどちらも素朴な独断であるという点ではまったく共通していると言うわけです。

それに対して九鬼は、まず現在の偶然があると考える。キリスト教は、まず未来の目的があると考え、近代科学は、まず過去の原因があると考えるわけですが、九鬼は、まず現在の偶然がある、と考えるわけです。そして、これも最初のほうで長岡先生からのご質問のときに申し上げましたけれども、現在の偶然を、過去の原因と結び付けた場合に因果的必然が成り立ち、未来の目的と結び付けた場合に目的的必然が成り立つ。ということは、必然性というのは、その都度の新たな偶然性によって、絶えず更新されていくわけです。こういうふうな、偶然性と必然性との交互的な制約のことを、九鬼は「運命」と呼んでいる。だからそれは動的なものなんですね。予め決定されているものではなくて、絶えず更新されていく動的なものです。

ですので、改めてご質問に戻るとすると、運命と一口に言っても、それは実のところ、キリスト教的な摂理のことを指し

ていたり、近代科学的な決定論のことを指していたり、あるいはその両者が渾然としていたりと、様々な場合があると思います。それが運命というテーマのおもしろさでもあるんでしょうけれども、少なくとも哲学的にものを考える場合には、自分がどういう意味で運命という言葉を用いているのかについては、自覚的であるべきだと思いますね。

少なくとも、摂理と運命とは使い分けないといけない。これは全然違う、まったく正反対の概念ですから。そして九鬼は、その両者の間にあるものを、いわば本当の意味での運命だと言っているわけですけれども、これは一般的な用語法ではないですから、難しいですね。何か別の、いい呼び方があれば教えてほしいです。

○長岡　運命と言って、今、決定論的なお話をされたんですけれども、僕は逆に仏教的で言うと、業（ごう）という考え方もありますよね。自分が何かをなしていくと、そのなしていったことが、次の契機に何かつながっていく。こういう輪廻というのも、やっぱり、そういうような行為とすごく結びついているようなところがあって、だからこそ、ぐるぐる回っていくと。それは、どうしても自分が生きている限り、それを離れることができないのだと思います。

そのような運命の中において、自分たちがどういうふうに行為していけばいいのかというところは、これ結構切実な問題としてやっぱり出てくると思います。

きょうの古川先生のお話を聞いてると、やっぱり瞬間における新しさというか、創造の問題ですよね。これをどういうふうに僕たちはすくい取っていけばいいのかというか。そこで、普通にやっていけばいいのか、それとも、何かしらの意志の転換とか、そういうところと向き合わなきゃいけないのかとか、ここらへんは結構おもしろい問題かなと。

そこで、九鬼は、耽美的な人生観をとりますよね。一方において京都学派は仏教から影響をうけていたので、その問題を宗教から考えていきます。

宗教と美は両方とも根本的な問題であって、このような両者の基本的立場の相違が運命の受け取り方においてどう現われてくるのか、とても興味があります。

○山根　九鬼では、運命という概念に人間が意志と行為によって偶然を必然にするという、人間の能動的な過程が入っていたのですけども、運命という言葉、日本語、昔はどうかわからないですけど、今だと運命の人、運命の相手というロマンティックな響きがありますね。それがすごくポジティヴな意味を持ち得るのは、何かその運命、自分の人生の進み方、成り行き、生き方というものが、より大いなるもの、自分よりも大きなものに支えられているんだというところから来るのかなと、そういうニュアンスがあるのかなと思います。

それと、人間の能動的な契機が入る九鬼の運命概念というのは、どういう関係にあるのかと、感想を抱きました。

○司会　さまざまな話題が出てきまして、もっとたくさんお話をおうかがいしたいところですが、大幅に時間を押しまして司会の不備にて申し訳ございません。

きょうはとても大勢の方にご来場いただきまして、大変有意義な第一回目の講演会になったのではないかと、思っております。

改めまして、古川先生を初め三名のご登壇者の先生方に、皆様、どうぞ拍手をよろしくお願いいたします。（拍手）

ありがとうございました。

以上をもちまして、「第一回九鬼周造記念講演会」を終わらせていただきます。今後も、年に一回のペースでこの回を継続してゆく予定です。次年度の日程などは甲南大学のホームページ、研究所のツイッターなどにお知らせとして掲載されてまいります。今度ともよろしくお願いいたします。

どうもありがとうございました。